いかり 5

2001.11.4

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会ニュース

〒657-0064　兵庫県神戸市灘区山田町3-1-1　（財）神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760　FAX 078-821-5878　E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp

訪中報告—山東と北京

安井三吉

今回私は、中国社会科学院近代史研究所（所長張海鵬先生）の招請を受けて、８月１９日から３０日にかけて訪中しました。目的は、日中戦争に関する資料の収集と関係者との交流ということです。また中国人民抗日戦争紀念館（館長張承錠先生）からも招請状をいただいておりましたので、この機会を利用して昨年に引き続き、戦争中神戸港に連行され、戦後帰国し、現在もなお健在な生存者の方々—中国語では“幸存者”—を訪問することを計画したわけです。本来なら、昨年と同様村田壮一さんとご一緒するはずでしたが、村田さんが勤務先の都合で参加を見合わされたため、今回は私一人で行くことになりました。

昨年は、河北省の保定、石家荘、河南省の原陽を訪問し、９名の生存者の方々にお目にかかり、お話を聞くことができました。この時のことについては、『いかり』３号（２０００年１０月）と『神戸新聞』（２０００年９月９日）に、村田さんが詳細な報告を書かれていますので、ご覧下さい。さすがジャーナリスト、簡潔に書かれています。今年はどうしましょうかと村田さんと相談した結果、山東省に行こうということになりました。河北と河南については、中国はもちろん日本でもすでに多くの方々が調査に入られていますが、神戸港に連行されてきた中国人は９９６人で、氏名が判明しているのは８５２名（８５．５％）で、その省別内訳は表１のとおりです。山東省は河北、河南に次いで多いにもかかわらずまだほとんど調査されていないのです。

表１　神戸港連行中国人省別内訳

河南	２５６人	３０．０％
河北	２３５	２７．６
山東	１６５	１９．４
上海	９２	１０．８
江蘇	４０	４．７
その他	６４	７．５
合計	８５２	１００．０

それに私たちの力では、全面的な調査はとても無理なことで、どこか場所を特定して行うしかないという事情もありました。幸い山東省については、昨年訪中した際、雑誌『抗日戦争研究』副編輯長の栄維木さんのご尽力により山東省社会科学院の趙延慶先生と北京でお会いし、来年は山東に行くかもしれないのでそうなったら宜しくとお願いをしておいたという経過もありました。

趙先生との連絡は、もっぱら北京の栄さんを経由して行いました。ところで山東省から神戸に連行されてきた人々（氏名判明者）の県別内訳は、表２の通りです。

表２　神戸港連行中国人山東省県別内訳

日照	２９人	１７．６％
汶上	１３	７．９
膠	１０	６．１
諸城	８	４．８
平度	７	４．２
文登	５	３．０
勝	５	３．０
蓬莱	５	３．０
その他	８３	５０．３
合計	１６５	１００．０

私たちとしてはもっとも数の多い日照県での調査を考えて、趙先生にそのような希望をお伝

えしておきました。しかし、今回の生存者探しは大変だったようです。７月末になっても趙先生からは生存者にお会いできるという連絡はありませんでした。村田さんが今回の訪中を断念せざるをえなかった理由の一つは、この点にもありました。私は、かねがね山東に一度は行ってみたいという願望を持っていましたのでたとえ生存者にお会いできなくても他の場所を見学することで計画を進めることができると考えていました。北京の栄さんから朗報が入ったのは、８月１６日、出発３日前のことでした。趙先生からの連絡で、生存者に会えるかもしれない、ということでした。しかし、その時は氏名はもとより何県の方なのかはまだ分りませんでした。

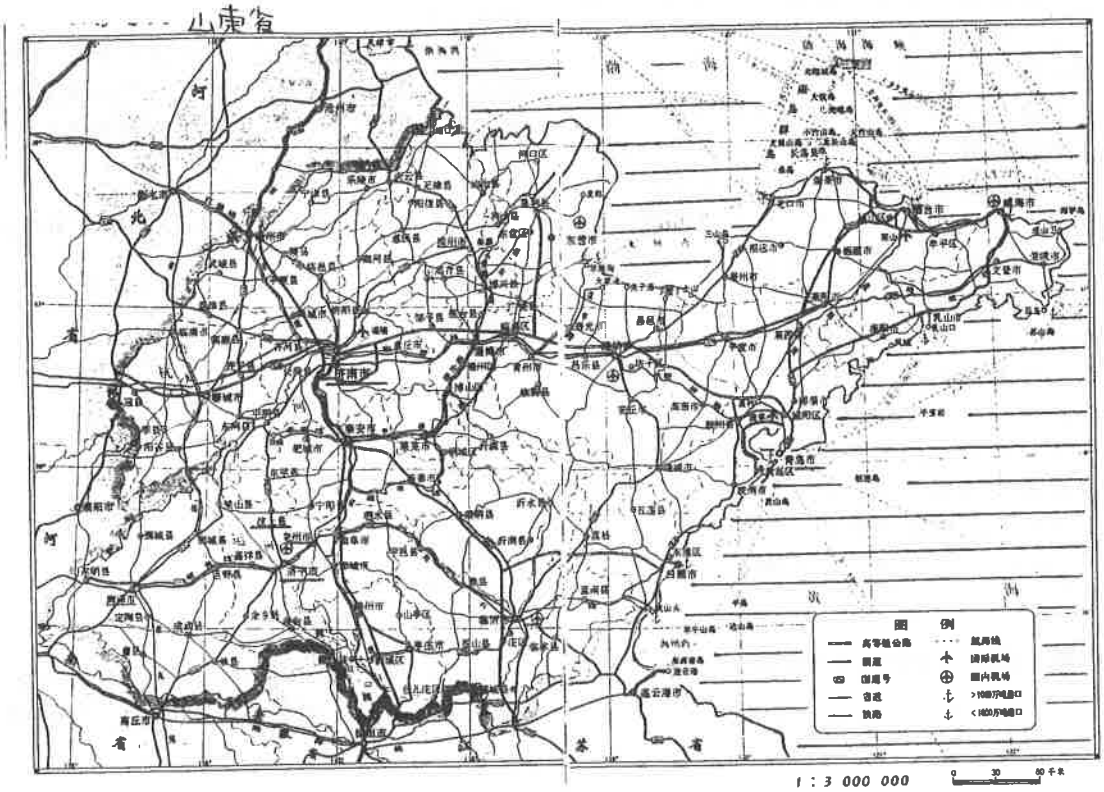
８月１９日、関西空港から北京へ直行しました。空港では、近代史研究所の劉紅さんが出迎えてくれました。今回の中国滞在中の日程は、彼女がすべて手配してくれました。近代史研究所での史料調査、青年討論会への参加、私の「自由主義史観」についての報告などについては別に書くつもりですのここでは省略します。また、８月１３日の小泉首相の靖国神社参拝の直後ということもあって、この問題と教科書問題はどこへいっても話題になりましたが、この点についてもここではふれないことにします。

１　新華院

８月２１日、北京駅１３時３０分発の快速列車で済南へと向かいました。車中子ども連れのお母さんと同席になりましたが、その子は車掌からゲーム機を借りてきて車中ずっとそれで遊んでいました。乗客の様子からみんな随分と豊かになったなあとの印象を深くしました。北京から４時間３０分、６時に済南に到着しました。列車が止まるとすぐ趙先生が車中に乗り込んできて、私を迎えて下さいました。これには大変恐縮させられました。

その夜、趙先生と社会科学院外事処副処長の勁東方さんと夕食をご馳走になりながら、済南での日程について打ち合わせをしました。２２日は、連行する中国人を一時収容していた場所、集中営である新華院、万人坑それに済南事件の記念碑を見ることにし、２３日に幸存者に会いに行くことになりました。この時はじめて汶上県に行くことを知りましたが、私は汶上県がどこのあるのかまったく知りませんでした。ただ、山東省から神戸港へ連行されてきた中国人の名簿を持ってきていたので、そこが日照県についで二番目に多い出身地だということは、ホテルの部屋に戻って確認することができました。とはいえ今年も準備不足は否めません。すくなくとも復刻版『華人労務者就労顛末書』を持って行かなかったったことは失敗でした。

翌２２日、趙先生と社会科学院の孔鵬瑞先生の案内で新華院などの見学を行いました。新華院は、現在は「山東済南幼師」になっています。査巾さんという１９８６年に退職された女性の



方が案内をして下さいました。この大学は幼稚園の先生を養成するところで、１９５８年に創立されたとのことです。建物はすべて建てかえられていて収容所当時のものはないとのことでした。しかし、入り口にある大きな柏の木や学校の周囲にある濠は昔の面影を残していました。１９９２年に工事のためキャンパスの一部を掘り返したところ沢山の白骨が出てきたとのことです。一通り見学したのち、応接室でさらに詳しい説明を受けました。学生たちには、新華院のことを折りにふれて説明しているが、残念ながら当時の档案はここにはない、とのことでした。しかし、資料として、１９９５年８月に趙壽冬氏が書かれた「昔日魔窟、今日楽園　不忘過去、珍惜今天―日寇残害中国人民的魔窟“新華院”」という新華院概史（A4 版５枚）と「新華院平面示意図」という略図をいただいた。これらは当時の様子を知るうえで貴重な資料です。ここで、このパンフレットによって新華院について簡単に説明しておきましょう。

新華院は、北支那方面軍が１９４３年３月に設置したものです。４４年から４５年８月の間、ここを管理していたのは、「仁字第２３５０部隊」、後の「依字第２３５０部隊」で青井真光中尉が部隊長兼院長を勤めていました。（パンフレットには、これとは別に従軍僧の桜井栄章が院長だったとも書かれています）。千仏山の麓にあった「救国訓練所」を合わせて拡大し、捕虜だけでなく、連行してきた一般の農民たちも収容しました。２５万平方メートルあり、常時２５００人を収容することが出来ました。東西に二つの農園（平面図では三か所）があり、収容者を働かせました。北側には、無影山に至る一帯にはここで殺された死体を埋める万人坑がありました。新華院の周囲は壁で囲まれ、その上には高圧電流の通る鉄条網があり、要所には監視搭がおかれ、また壁にそって幅５メートル、深さ５メートルの濠がめぐらせてありました。逃亡を防ぐ為です。

内部は内禁区と外禁区とに分かれ、内禁区は幹部隊室、図書室、医務室などがあり、また外禁区には捕虜たち（訓練隊と呼ばれた）が収容されていました。日本軍の執務室の後ろに運動場（操場）があり、ここで朝夕収容者の点呼や体操が行われました。

日本軍は、漢奸、手先（走狗）を育成して収容者を直接管理させ、また国民党軍将校のなかから選抜して幹部隊を組織して、よりましな待遇を施して、収容者の管理、弾圧に使いました。また、収容者にさまざまな任務や仕事を割り当て、彼らの間を分断し、相互に監視、労働させるなどしました。まさに「華を以って華を制する」、「戦争を以って戦争を養う」でした。

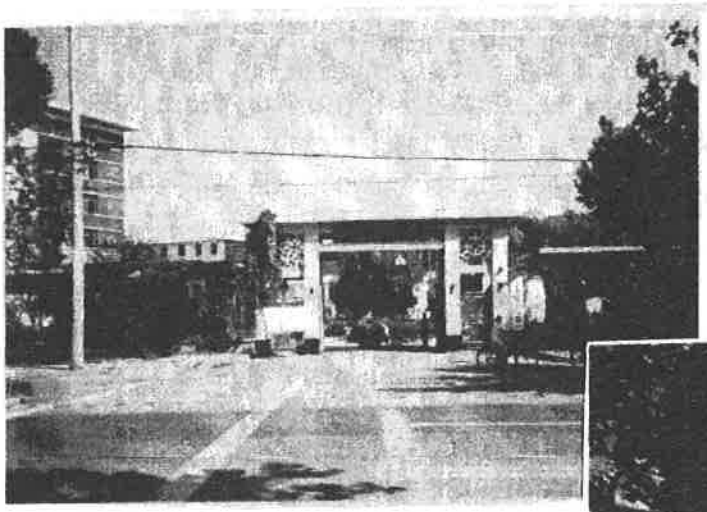
院には、常時２～３０００人が収容されていました。入所時は裸にして消毒し、囚人服を着せられました。支給された衣服はボロで、多くのものは裸足でした。寒さで凍死したものもいました。また血液検査の名目で採血をされましたが、これは日本軍の輸血用の血液として保存されました。炎天下でも水は十分には飲めませんでした。夜明け前から起こされ、一日１６、７時間の労働です。骨折や手足は擦切れてただれたりしたものもいました。何かあると軍用犬が襲いかかってきたり、時には銃でなぐられたり、ひどくなると針金で木につるされて銃剣で刺し殺されたりもしました。食事は、一日１２両（６００ g）の粟で、かびが生えていたり虫が混入したりしていました。野菜はほとんどでませんでした。

規則からはずれると監禁室に閉じ込められ、餓死を待つのみでしたし、逃亡を企てても鉄条網の上で焼死するだけでした。不服従者は銃剣で殺されました。一度病気になると、重い軽いにかかわりなく“病室”に送り込まれました。“病室”とは名ばかりで不衛生きわまりなく、またネズミが噛みつくなどしてここに入れられると数日で死亡して行きました。場合によっては、注射によって死を早めることもありました。

死体は、一旦死体置き場（停屍房）においた後、一定の数に達すると馬車で外に運びました。一台に６体、冬には一日５、６台出て行きました。運びだされた遺体は坑にほうり込まれ、上に僅かの土をかぶせただけで放置されたので、犬がきて食いちぎっていきました。そのため一面白骨となり、人々は万人坑と呼ぶようになったのです。趙寿冬氏は、この概史のなかで１９４３年３月から４５年８月の間、新華院で殺害された人は「３万５０００人」にも上ったと記しています。この数字が何に基づくものかは判明しませんが、一つの情報としてお伝えしておきます。戦後、済南市の人々は、この新華院での暴行殺人について提訴し、院長の青井真光は、市内引き回しのすえ銃殺されたとのことです。

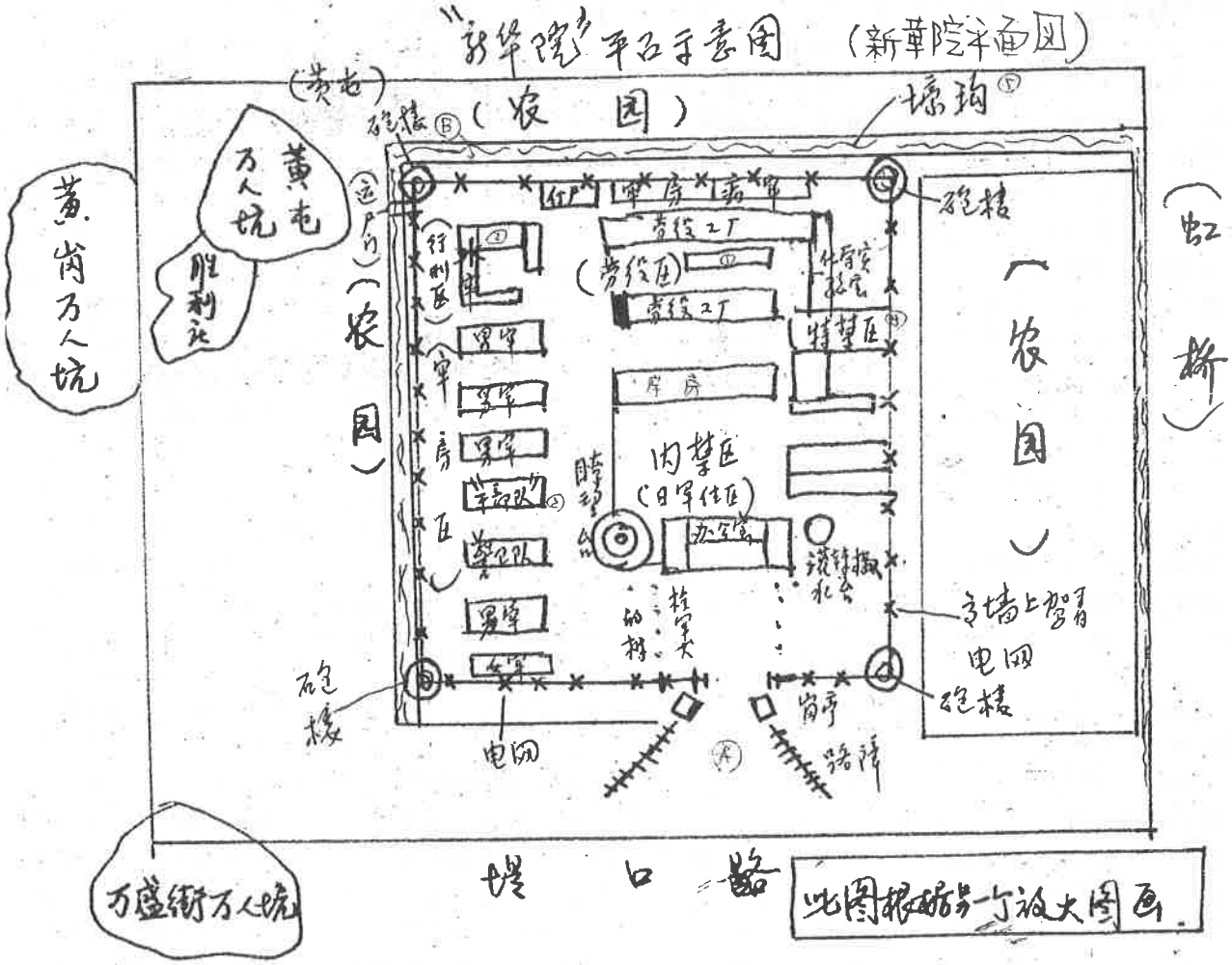
各地で捕えられた中国人は、この新華院に一旦収容され、一定の訓練を受けた後、「身体強壮」の者が選抜され、日本に送り出されたのです。

済南幼児師範大学での参観をおえて、市の中心部にある「済南５・３惨案紀念碑」に向かいました。済南惨案とは、１９２８年５月、北京を目指す国民党の北伐軍と日本軍第六師団が済南で衝突した事件で、このとき日本軍の砲撃により市民数千人が犠牲になりました。碑の前で

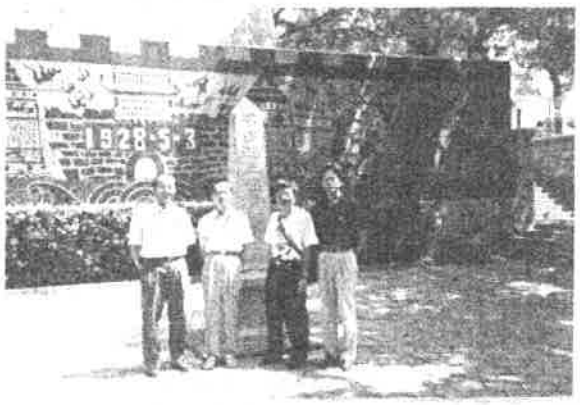


山東済南幼師正門

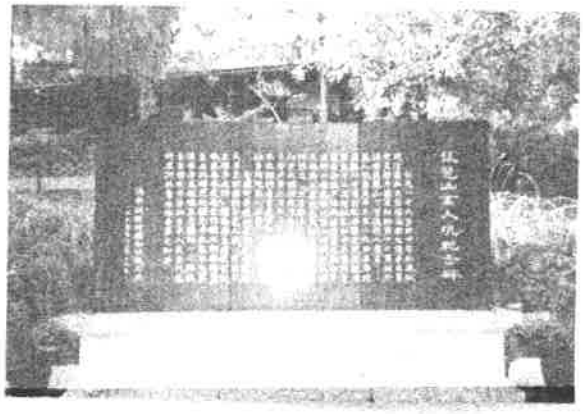
山東済南幼師周囲の濠



私たちが教科書問題や靖国の問題について議論をしていると二人の男性が近寄ってきて話しに割り込んできたのです。その一人が、葉盛吉（１９２３－１９５０）のご子息で台湾の成功大学教授の葉光毅氏でした。氏自身は、大阪大学の出身で、神戸大学にも知己の方がいるとのことでした。父親の葉盛吉は、台湾の生まれ、仙台の二高、東京帝大医学部卒で戦後台湾に戻って中国共産党に入り、５０年国民政府によって逮捕、処刑された人物です。始めは何のことかわかりませんでしたが、岩波の同時代ライブラリーに楊威理『ある台湾知識人の悲劇』というのがあるでしょう、といわれて思い出しました。もう何年もまえに読んだ記憶があったからです。帰国して研究室に確かにその本がありました。まったく奇遇というべきでした。葉さんの話は、もっぱら中国はそのスケールの大きさを踏まえないと実情は理解できないだろうというものでした。およそ１時間半、趙先生たちを交え議論になりました。おかげですっかり昼食の時間が遅くなってしまったのですが、台湾の人が大陸の状況をどう理解しているのかを知るうえで興味深いものがありました。



左から2人目趙先生、右から2人目葉氏



お昼をおえて、今度は、市の北西に位置する「琵琶山万人坑紀念碑」を参観しました。現在は、「済南試金集団公司」の敷地内になっていて、ここでは崔同公司党委員会弁公室主任が案内してくださった。崔主任からいただいた「“琵琶山万人坑”簡介」によれば、この万人坑は長さ４０メートル、幅４２メートルのもので大小８つの穴があったとのことです。１９４０年から４５年までの間、北支那方面軍第十二軍と第四十三軍によって作られ、使用されていました。山東省検察院と済南市検察院は１９５４年１２月と５５年１月に現場検証を行っています。また法医学者たちの調査によれば、ここで殺害され、埋められた人の数は７６４人にも上りました。山東省公安局には、園田慶幸（傀儡山東省政府最高顧問）らのこの万人坑に関する自供書があるとのことです。

敷地内には、１９９０年１２月、当時の「済南試験機廠」の全職員・労働者によって建てられた記念碑があります。

「済南５・３惨案紀念碑」といい、新華院といい、またこの「琵琶山万人坑紀念碑」といい、済南市―おそらく中国の町や村のいたるところ―には日本の侵略の爪あとを示す遺跡が今もなおあちこちにあるということを実感させられました。そしてこうした戦争の遺跡とかかわって、その迫害を受けた人々自身―幸存者―あるいはその遺族たちが無数にいるのだということにあらためて思い至らさせられました。その夜は、ホテルで山東省社会科学院の許金題副院長はじめ多くの先生方が歓迎の宴を開いて下さった。ここでも、教科書と靖国の問題から日本の右翼化、小泉首相の支持率の高さ、花岡事件の和解、劉連仁裁判の行方、今後の相互交流、さらには江沢民が提起している「三つの代表」（私営企業経営者の入党を認めるなど）論といった問題が話題になりましたが、さらには山東省の男はなぜあんなに大きい（山東大漢）のか、山東省にはなぜ美人が多いのかなど時に緊張、時に笑い大いに盛り上がりました。部屋に戻って明日、幸存者の方にどのような質問をするのかなどもう一度整理し直して眠りに就きました。

３　郭庭軒さんと朱元鳳さん―汶上県

８月２３日午前８時、社会科学院の用意してくれたワゴン車に乗り込む。雨が降り始め、外は真っ暗でした。その日の長い行程を考え、心配になりました。社会科学院からは、外事処の勁さん、それに趙先生と孔先生の３人が同行して下さった。しかし市内を抜ける頃には雨も上がり、良く舗装された道は信号はめったになく、車は猛烈に飛ばしました。ただ、運転手も目的地は初めてらしく、途中なんども停車しては道を確かめていました。小高い丘の間を抜けてゆ

くのですが、いまにも水滸伝の英雄や義和団の兵士たちがあの三角の旗を掲げて丘の上に出現してくるような感がしてなりませんでした。１１時２０分、車は汶上県人民政府に到着しました。出発から３時間２０分かかったわけです。地図で見ると済南市からずっと南に位置し、さらに南西に下ると孔子廟で有名な曲阜に至ります。

汶上県は人口７２万、県政府で李臣興副県長ら県の関係者の方々の出迎えを受けました。これは、大事になってきたなあ、というのがこのときの印象でした。社会科学院から県政府に生存者探しの依頼がなされたのでしょう。県の車に先導されて高粱畑のなかをおよそ１５分、とある農家に到着しました。そこが、インタビューの場所でした。現在の住所は汶上県次丘鎮。村の人々も何人か集まっていました。日本人など初めてなのかもしれません。珍しそうでした。

１１時４５分、インタビュー開始です。実は、このとき初めて相手が郭庭軒さんであることを知ったわけです。こんな時一人ではなかなかうまくいかないものです。写真をとり、テープを操作し、インタビューをしなければなりません。ここで、大失敗をしました。

手順を間違え、録音に失敗していたのです。そのとき確認しておけばよかったのですが、慌てていたのでしょう、ホテルの戻ってから入っていないことに気ついたのですがまったく後の祭りというのはこんなことをいうのでしょう。それに私の中国語の聞き取る力にも大きな限界がありました。まず郭さんの言葉がほとんど分からない、これを言い換えて下さる趙先生たちの言葉もなまりがあって十分には聞きとれないというのが実態でした。以下は、そんな不充分なままでの私のメモを再現したものです。間違いがないことを念じます。それと先にも書きましたように『華人労務者就労顛末書』を持ってこなかったことも大きな失敗でした。帰国後、『顛末書』に郭さんのことが明記されているのを確認しましたが、これを持って聞けば、もっと正確で、突っ込んだ質問ができたはずで、この点も残念でなりませんでした。

郭さんは、今年７７歳、捕まったのは１９か２０歳の時、すなわち１９４３年９月の初め（農暦）だった（『顛末書』では、４４年）。当時父親は東北（旧満州）に-行っていておらず、母親と祖父だけだった。当時は、八路軍の自衛隊に属していた。ご飯を食べている時に捕まった。一部は殺され、一部は逃げた。一緒に捕まったのは２０人余りだった。南站鎮から縛られたま

郭庭軒さん

ま、歩いて済寧に行き、１週間滞在した後兗州に行き、そこで１５日ほど滞在した後済南に行った。新華院という名前は知らなかった。黒い色の服を着せられた。黒は八路軍のものを意味した。国民党軍からきた者は緑色の服だった。食事は粟で、腹一杯にはならなかった。ひどく殴られた。ここには半月ほど滞在した。新華院を出発する時は行き先は知らされなかった。青島には一日とまり、翌日船に乗せられた。ここでも行き先は知らされなかった。船中の食事は、マントウ、粟飯で布団などなかった。５－６日して下船した。他の人が下関だといっていた。消毒はなかった。藤井という人が迎えに来た。列車に乗せられた。下車する時、字の読める者が神戸だといった。旅館は鉄道の西側にあった。新華寮の名は記憶にない。夜が明けると起床、食事は雑米、包子などで腹一杯にはならなかった。寮には２００人位いて、河南、四川からも来ていた。部屋の中では話しは自由だったが、管理人はよく殴っていた。食事が終わると仕事で、荷物の積み下ろしは危険だった。休日はなかった。しょっちゅう爆撃があった。外出はできず、日本人との接触はなかった。その後石川県に移された。大阪からも中国人が来た。日本の降服はそこで聞いた。これで故郷に帰れると思った。日本降服後も仕事をしていたが、もはや日本人は我々を管理できなくなっていた。帰国のことは中国人（国民政府の代表？）が来て話してくれた。９月（農歴）に帰国したが、その時は、一銭の支給もなかった。下関から船に乗り、塘沽で下船した。身の回りのものしか持っていなかった。中国に戻ってとてもうれしかった。天津に行き、そこで国民政府から兵隊になれと言われ逃げた。途中、八路軍が護送してくれた。家について“ただいま”というと母は泣き出した。日本に行っている間は、親戚のも

のが家を助けてくれていた。

人生でもっともつらかったことはやはり捕まり、日本に連行されたことだ。一番幸せなことは今、子どもや孫と一緒に一家団欒の生活を送れることだ。日本に対しては、賠償を求めたい。

インタビューが終わったのは１時でした。そこで写真をとり、郭さんはじめ村の方々に別れを告げ、車に乗り込みました。お昼をご馳走になった後、同じ鎮で別の村にいるもう一人の生存者を訪ねることにしました。

朱元鳳さんといい、８０才（数え？）の方である。神戸ではなく大阪に連行された方である。インタビューは、３時に始まった。朱さんはお元気そうだった。捕まったのは１９４３年８月のことという（帰国後桜井秀一さんからいただいた資料では４４年）。当時朱さんは八路軍の機関大隊（県自衛隊？）で総勢２００人余りの一員だった。攝州で日本軍と傀儡軍戦い、一部は撤退したが朱さんら４０名余りが捕まってしまった。当時家には母と二人の兄とかれらの嫁がいた。上の兄は農民、下のは教師だった。腰に縄をつけられ南站まで歩いて連行された。そこから済寧に行きそこで半月いた。さらに汽車で攝州にいった。そこの臨時収容所（看差所）に１２日間留まった。そこから済南に連行され、新華院に入れられた。緑色の服を着せられた。毎日死体が運び出されていた。今にも死にそうで、半眼、歯をむき出しにしたままの者もいた。“新民体操”といったものをやらされ、できないと殴られた。半月ほどたって別のところに行くことになった。行先は言わなかった。出発前に身体検査があり、熱があったり、気管の悪いものは除かれ、４００名余りが選抜された。青島で４日滞在した、日本人は、中国で仕事をしてもらうもだなどといっていた。船中の食事は、とうもろこしとか窩頭といったものだった。青島から１１日かかった。どこで下りたかは覚えていない。日本兵が出迎えた。汽車に乗った。下りると時、だれかがオーサカといっていた。（ここで朱さんは、突然片言の日本語の単語をしゃべりだした。）ハナ、ミミ、メシ、タバコ、イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、オバアサン、オトウサン、オクサン、ムスメ、チュウタイチョウ……。床は木で、地下１階、地上１階、大部屋に皆で一緒に寝た。２００人ぐらい。宿舎の前は川で、向こう岸に発電所があり、８本の煙突があった。起床は朝５時、おにぎりを食べた。腹は一杯にはならなかった。昼食は、小さなマントウや焼きソバ、ジャガイモなどで、夜は大きなおにぎりがでた。宿舎には３人の警察官がいて管理していた。仕事は、船の積み下ろしで、石炭、大豆、たまねぎなどであった。６時に仕事が始まり、途中昼食をとり、日が暮れると仕事は終わった。夜勤もあった。現場の監督は、工頭でよくバカヤローといっていた。黄という男が、荷物に下敷きになって死んだ。日本の降服は防空壕でで聞いた。降服と聞いて拍手した。鄭という男が神戸から来た。国民党の将校が集会で君たちは帰国するのだ、といっていた。かれは、“５１万の労工”が帰国する、死者は含まないといった。日本の会社は仕事をしていた時も帰国する時もお金を払わなかった。汽車に乗り、船に乗って帰国した。１１月のことだ。塘沽で下り、そこから天津に行った。国民党が歓迎してくれたが金はくれなかった。汽車で泊頭まで行き、そこから馬車で嚶城へ、そこからまた汽車で済南へ、（徒歩で？）白馬山を経て肥城までいった。そこで、八路軍司令部に連れていかれた。国民党軍の服を着ていたからである。家に戻るとすべて売り払われてしまっていたが、兄嫁以外はみんな元気だった。土地はなくなったが人は残ったということだ。帰国後は日雇い（短工）をやって暮らした。

もっとも苦しかったことは、日本に連行された時のことだ。食べるのも不自由で、殴られたりしたからだ。一番幸せなことは、やはりこの数年の暮らしであろう。食べもの、着るもの子どもたち、楽しくやっている。日本は忘れてはならない、私はこの目で見ている、中国人を殺したり、婦女を犯したりしたことを。永遠に忘れてはならない、日本は賠償すべきである。責任は指導者にあって、主には人民のものではない。しかし、日本人民は、この歴史の事実を認

朱元鳳さん

識しようとしないのではないかと心配している。

話が終わった時はもう５時になっていました。ちょうど２時間でした。８０才のお年よりにはすこしきつかったかもしれませんが、終始真剣に答えて下さった。済南市のホテルに戻ると８時になっていました。帰りは随分飛ばしたようです。ホテルで今後の交流について意見を交換した。

翌２４日朝、勁副処長と趙先生が駅まで車で送って下さった。３泊４日の短い日程だったが、二人の生存者の方にお会いできたことをはじめとして私にとってさまざまな収穫がありました。

４　抗日戦争紀念館

８月２５日、中国人民抗日戦争紀念館の李宗遠さんがホテルに出迎えて下さった。車で盧溝橋に向かう。車中、教科書と靖国、それに花岡事件の和解などについていろいろ意見を交換しました。魏永旺副館長、それに唐暁輝さんが出迎えて下さった。しばらくして張承錠館長も顔を出された。去年一緒に調査にいった方軍さんが所用でお会いできなかったのが残念でした。

李さんからその後の調査の進捗状況について説明がありました。

調査は順調に進んでいる。河北省の簑州、広平、順義（北京）、河南省の原陽で調査を行い、すでに２７名の生存者について聞き取りを行い、その記録はすべてＶＣＤに収録してある。回想録を出す予定である。日本側の関係者（監督など生存者、会社、医師など）の詳言がほしい。神戸では１９４５年１０月１０日に双十節の祝賀行事の時に警察と衝突したとのことだが、新聞記事はないだろうか？死亡診断書は正確だろうあか？天津から来ていた華僑で“叫一先生”という人はわからないだろうか？

などと調査の要望が出された。さすがに紀念館であり、この一年、こちらの調査が不充分なことを痛感させられました。

今回の調査には、山東省社会科学院の趙先生はじめ多くの方々から多くの便宜と協力をいただきました。ここに記してお礼の代えさせていただきます。（２００１年１０月２９日）

講演会の記録

三菱財閥と「強制連行」

2001 年 6 月 14 日午後 6 時 30 分より、神戸学生青年センター・ホールにおいて、「神戸港調査する会」のメンバーである金慶海さんを講師に、「三菱財閥と『強制連行』」をテーマとする講演会を主催しました。

三菱財閥は日本全国いたるところに事業所を持ち、海外へも遠くは南洋諸島にまで進出していました。したがって「強制連行」も、日本全国にわたっているだけでなく、アジア的規模に拡大しています。講演は、現在手に入る限りの資料を駆使し、三菱財閥の「強制連行」の実態の全貌に迫りました。

まず、財閥や強制連行の用語や概念の検討から始め、三菱財閥の起業から解体までの歴史に簡単に触れた後、日本全国の三菱財閥の事業所 158 社に合計 13 万 3,490 人が「強制連行」されたという竹内康人さんの推定数が紹介されました。これらの連行者は朝鮮人が最も多いが、中国人や連合国軍の捕虜も含まれています。中国人は北海道

の美唄炭鉱、夕張炭鉱、長崎県の高嶋炭鉱など 10 数カ所で、また連合国軍捕虜は、宮城県の細倉鉱山、神奈川県の三菱倉庫など数カ所で使役されています。

兵庫県では、三菱電機伊丹工場、三菱重工神戸造船所、三菱鉱業生野鉱山、同明延鉱山など 7 事業所で、判明しているだけで 4,578 人が連行されました。そのうち逃亡者数は 2,064 人にのぼり、死亡者数は 53 人、帰国者数は 2,390 人です。

三菱財閥の「強制連行」だけでも、まだ不明なところが数多くあります。その真相の徹底糾明を今後の課題とすることで、講演会は終わりました。

朝鮮班報告

神戸にある川崎重工業製鉄所に強制動員された朝鮮人労働者に関する問い合わせ

中間報告（２００１年１０月１１日現在）

朝鮮班では神戸船舶荷役株式会社に連行された生存者調査とともに、川崎重工業製鉄所葺合工場に強制連行された朝鮮人労働者に関する調査を開始した。

連行者の名簿は総数１３９８人。このうち江原道にある２郡１１面の８９人に対する調査を現地行政に依頼した。

問い合わせ送付先は江原道の横城郡で安興面、甲川面、書院面、隅川面、屯内面、晴日面、横城面の７面、洪川郡で化村面、斗村面、南面、内面の４面である。

回答は１０月１１日現在、横城郡の安興面、隅川面、屯内面、横城面からあった。

洪川郡の四つの面からは回答が無く、横城郡の残り３面も返事がない。

回答内容は次の通りである。

安興面：１０名の内
　生存者　　１名
　死亡確認　　３名（縁故者確認）
　＊１名移籍
　不明　　６名
隅川面：５名の内
　生存者　　なし
　不明　　３名
　戸籍なし　　２名
横城面：１３名の内
　生存者　　なし
　戸籍書類　　２名
　不明　　１１名
屯内面：８名の内
　全員不明（８月２３日現在）

＊引き続き調査する。

結果１名の生存者が確認された。その方は横城郡安興面に住所のあった鄭壽錫（松田壽錫）さんである。現在は 京幾道安養市東安区飛山２洞５７７－１１通４班進興アパートな棟 306 号に住んでおられる。電話連絡もつき、１０月１５日孫敏男さんが現地へ行き聞き取り調査をする予定。

特記したいのは、この手の調査依頼に対し回答をしてくれる韓国自治体は極端に少ないことである。確かに色々と多忙な仕事がある中で日本からの調査依頼は迷惑な事かもしれない。

前回の神戸船舶荷役株式会社への連行者の調査時も２７の自治体に調査依頼を送ったが、返事があったのは７カ所、残り２０カ所は返事がなかった。回答率約２６％である。

今回横城郡安興面の担当者柳英愛さんは全体の調査報告Ａ４、１枚、個人調査報告４名について同じく報告書、国民登録謄本、戸籍コピーなどＡ４、３３枚の資料を送ってくれた。電話でお礼を言いましたが、誠意ある対応がうれしい。

パンフレット案内

フィールドワークノート
「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行」

（Ａ５、１６頁、カンパ３００円、送料１４０円）

守恵一さんが描いてくださった素敵な地図がはいっています。
購入希望者は、上記郵便振替で送料とも４４０円をお送りください。

新たな事実を発見！～いかりツアーで～

在韓軍人軍属（GUNGUN）裁判を支援する会　古川　雅基

９月２３日、いかりツアーの午前中、私たちは「戦没船フィールドワーク」に取り組みました。目的は、私たちのGUNGUN裁判の原告が関係する戦没船についての調査でした。「戦没した船と海員の資料館」は、神戸元町の全日本海員組合関西地方支部のビル２階にあります。「開館から１年、毎日遺族の人が訪れない日は一日もない」そんな研究員・上沢さんの説明を聞いている時にも、広島から一人の女性が父の乗船した船の行方を求めて、来館されていました。

終戦後、政府が発表した船舶被害の総数は、官民汽船３５７５隻、機帆船２０７０隻、漁船１５９５隻。資料館の全ての壁に、びっしりと１２００枚の戦没船の写真が並んでいます。しかし、こうして船の写真が残っているのは戦没船の３分の１。中には一般の漁船もあります。運航中や漁のさなかに、海軍や陸軍から現地調達として、徴用されたのです。家族に連絡するすべもなく、突然海洋に連れ出され、何の武器も持たない漁船とともに運命をともにした人の無念や、帰らない男たちを待つ家族の思いがいかほどのものだったか・・・・・　私たちの原告の無念、遺族の悲しみと重なります。

上沢さんの協力を得て、原告の関係する戦没船を探し始めると・・・　「あったー！」
座っているすぐ後ろの壁に「辰武丸」の額縁が。原告№１４２　張学順さんの父、張在珞さんが乗っていたという船が、何とすぐに目に飛び込んできました。１９４３年5月１０日トラック島付近で米軍の魚雷で撃沈。陳述書に書かれている内容が、その額の絵の中に書かれていたのです。

次いで、戦没者（韓国朝鮮人）の名簿の中に、原告№１５０　金金洙さんの父、金福童さんを探し当てました。日本名「朝本福重」とあり、「童」と「重」のちがいはあっても、生年月日、出身地から間違いないと判断できました。船は「第七快進丸」。沈没したのは山口県とある。「ああ関門海峡ですね。米軍は関門海峡に約五千もの機雷を敷設して海峡封鎖しましたからね」と上沢さんが教えてくれる。１９４５年、６月２７日に沈没、船員２４名が戦死とある。金福童さんは機関部の軍属乗務員として記録が残っていたのです。しかし遺族の金金洙さんは、お父さんの戦死については何も知らされておらず、死亡通知も受け取っていません。なんと理不尽なことか。

「海を再び戦場にしてはいけない」と誓う上沢さんたちの長い間の努力で、この日ひとつの真相が明らかになったけれど、私たちの国は、真相究明に何の努力もせず、放置したままなのです。

上沢さんは語ってくれました。「海軍は徴用する際に契約を交わしていますが、陸軍は漁船を沖でそのまま徴用し、手続きなど無視したのです。だから徴用された小さい漁船や乗組員などについては、一切不明のものも多いのです。」・・・そう。陸軍の発想は「現地調達」だったのです。侵略した先で焼き尽くし、奪いつくした、あの軍の同じやり方で民間船も徴用していたのです。

午後からのいかりツアーとあわせ、私たちの役割を胸に刻んだ有意義な日でした。

なお、「戦没した船と海員の資料館」は、平日のみの開館ですが、まとまった人数で事前要望があれば、休館日にも開けてくれます。また、韓国朝鮮・台湾出身の被害者名簿も見せてくれます。

近い近い昔の旅（いかりツアー）

東條義子

私が今回いかりツアーに参加しようと考えたのは、文部科学省が扶桑社の「つくる会」歴史・公民教科書（中学校）を検定に入れ、市民権を得させたことが発端です。

戦争を美化し歴史を歪曲したことです。小泉政権の衣の下の鎧を見たからです。

―過去に目を閉ざすものは現在を見ることができない（ヴァイツゼッカー）―

口では国際理解、国際交流と言いながら、36年の間、植民地支配を続けてきた事実、朝鮮だけではなく1868年、明治維新で日本が近代国家としてスタート。1869年アイヌの大地、蝦夷地を北海道と改称し、1872年琉球王国を琉球藩とし、1879年沖縄県として併合。1895年日清戦争で台湾を、1910年日ロ戦争で朝鮮を植民地支配したのです。

日本が近代社会を成立させるために、経済発展させるために、国民という一つのまとまりを形づくるために天皇に忠誠を誓う･･･「皇国臣民」づくりをしたのです。

その上、日本の周辺アジアの国々を“遅れた社会”“日本人より劣った人間”と蔑視し、それぞれの国の独自の文化・歴史などないとし、民族の独立運動を阻止し、おさえ込んできたのです。（たしか江戸時代までは一時期を除いて友好的で、大陸の先進文化を伝えてくれる憧れの対象でもあったのですが－。）

この15年戦争で強制連行をあたりまえのようにやったのです。

戦後57年が過ぎようとしているのに、戦争に学ぶことなく、歴史的反省もなく、何年かかってもドイツ・ポーランド間のように、戦時賠償・戦後補償に真正面から取組まないのでしょうか。

今回のツアーで現地に行っても何も無い。目を閉じなくても蓋をしなくても消え去っている。しかしあったことは事実なんです。私が近い近い昔と言ったのは、新華寮・淹の茶屋の丘陵の東垂水寮・大手山側の大手寮・本庄町のダイジンサン（ガスタンク）周辺の朝鮮の人々のトントン屋根・禅咼寺から妙法寺にかけての朝鮮人の住い、しっかりと脳裏に浮かべることができました。

又、連合軍の捕虜の人々のことですが、長田の大塚町から名倉町を通り新開地へ抜けていく道筋に、高い板囲いの家があり、人数は確かめるすべもありませんでしたが、白人の人々が寒い日には毛布にくるまって庭先でお日さんにあたっていたのを記憶しています。みんなとてもやせていました。8月15日の終戦後2ヶ月後、その家は無くなっていました。生きて国に帰られたかずうーと胸にしまったままです。

私にできることは過去から学び、今をしっかり受け止めて未来に役立てることだと思います。

会の活動の記録② 2000.10～2001.10

2000.10.29　ニュース「いかり」３号発行
2000.11.09　第１０回運営委員会
2000.12.14　第１１回運営委員会
2001.01.11　第１２回運営委員会
2001.02.08　田中宏さん講演会「中国人強制連行ー『外務省報告書』を中心として」於／神戸学生青年センター（以下、会場がセンターの場合は会場名省略）
2001.02.11　日本国内で港湾に強制連行された中国人の調査グループの会議（「港湾会議」）に飛田事務局長参加、於／新潟
2001.03.08　第１３回運営委員会
2001.03.31　朝鮮人強制連行真相調査団「フィールドワーク案内」（於／尼崎市小田公民館）に参加
2001.04.12　第１４回運営委員会
2001.04.30　ニュース「いかり」４号発行
2001.05.10　第１５回運営委員会
2001.06.15　勉強会「三菱財閥と『強制連行』」（金慶海）
2001.07.12　第１６回運営委員会
2001.08.19～26　中国現地調査（安井三吉）
2001.09.08～09　強制連行調査ネットワーク全国交流集会 in 大阪に参加
2001.09.13　中国現地調査報告会
2001.09.23　フィールドワーク、第２回「いかりツアー」、フィールドワークノート発行
2001.10.11　第１７回運営委員会

＜集会案内＞
川崎重工に強制連行された朴球會さんのお話を聞く会
日時　２００１年１２月１３日（木）
　　午後６時３０分
会場　神戸学生青年センター（阪急六甲下車、北東徒歩２分）
　ＴＥＬ　０７８－８５１－２７６０
参加費　５００円
主催　調査する会

＜第３期会費納入のお願い＞
調査する会の活動が第３期（2001.10～2002.9）に入りました。会費の納入をよろしくお願いします。
個人　１口３０００円
団体　１口５０００円
送金先：郵便振替＜００９２０－０－１５０８７０　神戸港調査する会＞
調査活動のための募金にもご協力をお願いします。

＜運営委員会募集中＞
調査する会の運営委員会は現在２９名。毎月第２木曜日の午後６時３０分から神戸学生青年センターで大体１０～１５名ぐらい集まって開いています。終了後の飲み会も？人気です。個人の資格の運営委員会もいます。関心のある方、是非一度のぞいてみてください。

編集後記

「いかり」は港の象徴である錨であり、強制連行され、神戸港で労働させられた朝鮮人や中国人の怒りでもあります。この二つをイメージするものとして、会のニュースの表題にしました。

★ニュース５号をお届けします。今回は安井代表の訪中報告が中心となっています。“幸存者”の聞き取りの他、新華院についての貴重な報告もあります。／早いもので会が発足してまる２年。当初目標の３年を前に、そろそろ成果のまとめ方を考えなければならない時期になりました。（堀内）
★来年は兵庫県下で「７３１部隊展」を開きます。いまから実行委員会に行って来ます。12/7には南京証言集会、12/21には山西省裁判集会、12/22には平頂山集会と集会がめじろ押しです。（飛田）
★アメリカでの多発テロの影響が在米アラブ系住民へのヘイトクライムがニュースにでます。事あるごとにマイノリティーが標的になる。戦争はまさに差別です。（吉沢）
★ハヤ、二年。色々と勉強になっています。仲間らもいいし、楽しい集まり。あと一年で記念碑を建てたいが、建設費用が心配。でも、やるっきゃない！
がんばろう！（金）
★本日（11月４日）の印刷、発送作業の参加者は少し少なめです。。

江上さま。

遅くなりのときれてなりて（？）正誤を送ってあります

2001.12/15　中村みなみ

『いかり』５号

安井「訪中報告―山東と北京」

訂正表

				誤	正
1	左		6	張承錠	張承鈞
2	右		11	頸東方	姚東方
3	左		14	聲冬	寿冬
〃	左	下	15	搭	塔
5	右	下	6	頸さん	姚さん
7	左		18	摂州	兖州
〃	左	下	9	摂州	兖州
〃	右		3	もらうもだ	もらう
〃	右	下	18	嚶城	禹城
8	左		9	頸副処長	姚副処長
〃	左		19	張承錠	張承鈞
〃	右		4	簑州	涿州
〃	右		9	詳言	証言
〃	右		13	うあか	うか

以上